

主 題：神の人々よ。立ち上がれ。

聖書箇所：随所

今週は成人式が控えています。成人のお祝いというのは私たちの国だけの行事ではなくて、世界的に祝われています。ユダヤ人たちの成人式は「バルミツバー」と呼びます。ユダヤ人の律法によれば13歳までは律法を遵守する責任はありません。でも13歳を迎えれば、つまり成人を迎えればその責任が生じ、彼らは律法を守ることが要求されます。

律法の中で最も大切な命令は一体何なのか——。あるひとりの律法学者が主イエス・キリストにそのことを質問しています。「すべての命令の中で、どれが一番たいせつですか。」と。その時に主イエス・キリストは彼にこう答えておられます。「イスラエルよ。聞け。われらの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。」と。皆さんよくご存じのマルコの福音書12：28からのみことばです。一番大切な戒めは神を愛すること、そして隣人を愛することであると。また、イエス様はマタイ22：40で「律法全体と預言者とが、この二つの戒めにかかっているのです。」と言われています。すべての律法はここに要約される。もしあなたが心を尽くし、神を愛するならば、隣人を愛するならば、あなたは律法を守っていることになる。

A. 「一番大切な律法」：「神を愛すること」

この一番大切な律法、神を愛するということについてきょう私たちは学びます。成人を迎えたユダヤ人はこの命令を守らなければいけない。でもこれは彼らだけのことではありません。私たち信仰者すべてが神様から望まれていること、あなたが神から望まれていることがまさにここにあるのです。今私たちのこの時代にあって、教会にあって、私たちが必要とするのは、神がお喜びになり、神が喜んで用いようとする人、この神を心から愛する人たちです。多くの信仰者は何度も聞いているメッセージですけれども、いま一度このメッセージをしっかりと聞いて、心にとめなければいけない。神が一番望んでおられる神を愛することとはどういうことなのか、また、神を愛するということはどう生きることなのかをみことばの中から学んで行きます。

1. 神は唯一のお方

まずマルコ12：28－30を見ていただくと、主イエス・キリストがこの律法学者に一番大切なのはこれですと答えになりました。「イスラエルよ。聞け。われらの神である主は、唯一の主である。」と。神を愛するためにまず私たちが覚えるべきことは神というはおひとりであるということです。それ以外に神は存在しないということを神ご自身が明確にお話になっておられる。また「あなたの神である主を愛せよ」と、個人的な責任です。だれかが愛しているからそれでいいではないのです。この救いに与ったあなた自身が唯一の神である神を愛するようと、あなたの責任が強調されています。

確かに「どの命令が一番大切なのか」という質問に対してこの「心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。」という命令が一番たいせつだとイエス様は答えになりました。ですから当然私たちはこの「愛せよ」というのは命令形だと考えます。なぜなら一番大切な命令の話だからです。でも驚くべきことは、これは命令形ではないのです。神がお喜びになる「愛」というのは、強制されてのものではありません。心からのものです。神を愛しなさいと言われて仕方なしに愛するような愛を神はお喜びにならない。神がお喜びになる愛というのは自分から進んで、自分のすべてをもって喜んで神を愛することです。ですから命令ではないのです。しかし、はっきりしていることはそれを神が望んでおられること、それを神がお喜びなること、そのことは間違いありません。

2. 神にふさわしい愛：愛し方

そこで神に対してふさわしい愛が30節に記されていました。「心」、「思い」、「知性」や「力」と名詞が四つ並んでいます。もちろんこれは旧約聖書のみことばを引用しているわけですが、それぞれのことばの意味を見ても気づくことは、とてもよく似通っているということです。「心」というと当然私たちが物を考えたり、計画したり、また私たちの意思であったり、我々の行動のすべてをコントロールしているところです。「思い」というのも考えや意思、そこに感情が存在しているところです。「知性」というのは、理解や感情、願いなどの機能としての心であり、こうなってくると混乱して来ます。なぜなら「心」という臓器はないのです。つまり私たちの内側の部分を表しているわけです。「心」も「思い」も「知性」も、そして「力」もそれぞれのことばを明確に区別することはできません。みんな関連しているからです。でもこのみことばが私たちに教えることは、あなたが願い、あなたが考えるすべてをもって神を愛しなさい、自分のすべてをもって、もっと言えばあなたのいのちをかけて主を愛しなさいと。

よく私たちが使うことばを使えば、全身全霊をもって、身も心もそのすべてをもって神を愛しなさいと。

なぜそのようなことが命じられているかはわかりだと思えます。そのような愛をもってあなたが愛されたからです。主ご自身があなたに示してくださった愛というのはいのちがけのものでした。主イエス・キリストの十字架の死をもって、あの犠牲の死をもって私たちは愛されていることを知ったわけです。神がいのちをかけてあなたを愛してくださった。それにこたえるに最もふさわしい愛というのは、我々のすべてをかけてこの唯一まことの偉大な神を愛することです。それがここで命じられていることです。「尽くして」ということばが繰り返されているのは、その重要性を強調しています。あなたの考えもあなたの思いもあなたの意思もあなたの感情も、あなたの内なるすべてをもって。

B. 「その実践」

さて、そうして私たちはどのような愛をもって愛するかというのを見たのですが、問題なのはどのようにそれを実践して行くかです。全身全霊をもって神を愛する。確かにことばではわかります。あなたのいのちをかけて神を愛する、それもよくわかります。では具体的にどう生きて行くことがその実践になるのかということについて今から見て行きます。きょう我々がしっかりと見て行きたいことは二つあります。一つはこの世よりもキリストを愛することです。もう一つは自分自身よりもキリストを愛することです。

1. この世よりもキリストを愛する／「世を愛するな」 ヤコブ 4 : 4

まずヤコブ 4 : 4を開いてください。ここに「貞操のない人たち。世を愛することは神に敵することであることがわからないのですか。世の友になりたいと思ったら、その人は自分を神の敵としているのです。」と、大変厳しいことが記されています。なぜかという、この世はこの世を支配しているサタンに従うものだからです。Ⅱコリント 4 : 4が「この世の神が不信者の思いをくらませて、神のかたちであるキリストの栄光にかかわる福音の光を輝かせないようにしているのです。」と言います。「この世の神が」とあります。サタンは間違いなくこの世を支配しています。イエス・キリストを信じておられない、この救いに与っておられない人がこの救いに絶対に与ることがないように、この救いを受け入れることがないように、サタンは邪魔をし続けます。しかし、サタンの働きはイエス様を信じておられない人だけに働くのではなくて、クリスチャンであるあなたのうちにも働き続けているのです。

* この世があなたに与える二つの悪影響

どんなことをしているのかというと、Ⅰヨハネ 2 : 15－17を見てください。ヨハネはここで今私たちが学んでいることをこんなふうに教えてくれています。「15 世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。16 すべての世にあるもの、すなわち、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。17 世と世の欲は滅び去ります。しかし、神のみこころを行なう者は、いつまでもながえれます。」と。ヨハネはここにこの世がクリスチャンであるあなたに与える二つの悪影響を教えています。

(1) 「神への愛を奪っていく」 15節

一つ目は世は神様への愛をあなたから奪って行くのです。あなたの神に対する愛を奪って行くもの、それがこの世であると15節のみことばが教えます。もしあなたが世を愛しているならば、「その人のうちに御父を愛する愛は」ないと。世はあなたの神様に対する愛をあなたから奪って行こうと働くのです。

(2) 「みこころへの忠誠心を奪って行く」 16、17節

二つ目にどんな悪影響をもたらすかという、みこころへの忠誠心をあなたから奪って行きます。あなたが主のみこころに忠実に従って行こうと願っているけれども、その願いをあなたから奪って行こうとするのです。17節を見ると「世と世の欲は滅び去ります。しかし、神のみこころを行なう者は、いつまでもながえれます。」とあります。「みこころを行なう者」とみこころに従って行かない者たちの話です。なぜかという、世はあなたがみこころに従って行くことを邪魔するのです。しかし、あなたがみこころに忠実に従って行くならば祝福をいただくとヨハネは言います。この16－17節は、この世は決してあなたが主と主のみこころに忠実に従って行かないように邪魔をするものであると教えてます。

そこに「肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢」と書かれています。実はこういったものがあなたの目を神様から別の方向、神様から世に向けさせる道具として働くものだと思います。

① 肉の欲

まず「肉の欲」とあります。この「肉」というのは我々人間が生まれながらに持っているものです。からだのことではなくて罪のことです。主イエス・キリストを信じたあなたにも残念ながらこの誘惑は働き続けて行きます。かつて私たちは生まれながらに自分の思いや考え、自分の願いに基づいて生きようとしてきました。イエス様を信じた後も残念ながらその誘惑は続いています。主のみこころに従って行くよりも、自分の思いや考えに従って自分のやりたいことをして行きたいと。こういった葛藤を皆さんはたびたび経験されると思います。少しぐらいこの世の生き方をまねて、彼らがやっているように生きて

もいいのではないかと。なぜかという世の中は私たちにこう言うのです。「イエス様を信じてどんな祝福があるの?」、「自分たちの思うように、好きなように生きるのは結構楽しいよ」と。「パーティをしたり、こんなに楽しんで好きなことをやって生きる。悲しいよね、イエス様を信じて、イエス様に従って行って、どんな楽しみをミスしているのか、どんな喜びを逃しているのか、あなたは知らない。だから少しこっちに来たら?」と、いろいろな形で肉は私たちに働きます。信仰生活というのは、イエス様を信じることによって全くこれまで持っていなかった新しい思いをいただいて、その思いに基づいて我々は生きて行こうとするのです。それは神に喜ばれることをして行こうという思いです。しかしそういう思いを持って生きていながら、この肉は私たちを別の方向に、かつて生きて来たように間違った方向に引っ張って行こうとします。世の中も捨てたものではない。みんな楽しそうにやっているし、みんな生きがいを持っているように見えるし、少しぐらい楽しんでもいいのではないかと。そうしてこの世はあなたを誘惑するのです。

② 目の欲

二つ目は「目の欲」と出て来ます。ヨハネが生きていた時代のギリシャ人やローマ人は娯楽や目を楽しませてくれるもののために生きていました。さまざまなものをもって彼らは楽しんでいただけです。それは時代が変わろうと同じです。我々の周りでも目で見て楽しむことは山ほどあります。テレビや映画、演劇などの数々の娯楽があります。少しお金を出せば、何でも見るができる。ヨハネは私たちにそういったものが実はあなたの心に働いて、あなたを世的にすると教えてくれるのです。なぜかという、今挙げたように私たちが目で見るもの、例えば今までごらんになったテレビのドラマや映画、すべてのものを振り返っていただいて、これを見たことによって私の信仰が成長しましたとか、これを見ることによって私の主に対する愛が増し加わりましたとか、私はもっと主のために生きて行こうという思いが強められました、そういったものをどれぐらい挙げることができますか?非常に難しいと思います。それは何を意味しているかという、私たちの周りにあるものは、あなたの信仰を助けてくれるものではないのです。それらすべてのものがしようとしていることは、あなたの目を主から別の方向に向けさせることです。みことばは私たちにそのように教え、警告するのです。

私たちがそれを見て、それによって我々の信仰が本当に成長するのだったらみんなで見る必要があります。そういったものが私たちに言うのは、「こういう生き方はすばらしいよ」、「こういう物の考え方はすばらしいよ」、「こういう生き方をしたら楽しいよ」、「こういう生き方をしても構わないよ」と。そういうものは私たちにこの世的な生き方をするようにと働きかけてきます。この世は必死になって信仰者であるあなたが神様に対して持っている愛をできるだけあなたから奪って行くように、中途半端な愛でもって神を愛する信仰者になるように、また主のみこころに忠実に従って行こうとしているあなたがそういう歩みをしないようにと、いろいろな手を尽くして一生懸命誘惑をし続けていることにお気づきになると思います。正直言って私たちがそういうものを見た後、娯乐的に本当に見てよかったなと思うこともあるかもしれません。でも信仰的にこれは見なければいけなかったなと思うものがどれだけあるかです。気をつけないといけないということです。サタンはあなたが思っている以上に賢く、あなたの心に確実に働くのです。

③ 暮らし向きの自慢

三つ目に出て来ているのが「暮らし向きの自慢」です。この「自慢」というギリシャ語は自分の重要さ、自分の大切さでもって人にすごいという印象を植え付けようとしていた自慢屋さんを説明することばです。自分のことを非常に自慢している人間がいたのです。その人は、自分がどれほどすごいのかを人々に印象づけようとするのです。私はこんなにすごいのですとか、こんなことをやったのですとか、こんなことを達成しましたとか、そういうことをいつも人々の前で語っているわけです。そうやって自分がすごい人であるということの人々に印象づけようとしていた。そういう人を表したことばで、「見栄を張る」という意味を持ったことばです。自分のことを人によく見せたい、すごい人なんだと彼らに思わせたいと、そんなふうにいる人たちです。

一体私たちは何を自慢して生きるのでしょうか。クリスチャンの皆さん、何があなたの誇りなのか考えてください。何があなたの自慢なのかです。パウロは救われる前あることを自慢していました。それは彼の家柄や教育、「私は八日目の割礼を受け、イスラエル民族に属し、ベニヤミンの分かれの者です。きついのヘブル人で、律法についてはパリサイ人、その熱心は教会を迫害したほどで、律法による義についてならば非難されるところのない者です。」(ピリピ3:5-6)と。恐らくこういったことを彼自身は今まで自慢し、こういうものを誇り、そして多くの人々はパウロの話を聞いてこの人はすごい人だと、みんな思ったはずです。家系もすばらしいし、教育もすばらしいし、何もかもすばらしい。信仰的にもすごい人だと。でも救われた後パウロはかつて自慢していたそういったことに対して「私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。それどころか、私の主であるキリスト・イエスを

知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくとと思っています。」（7節）、つまりパウロの自慢が変わったのです、パウロの誇りが変わったのです。このような人間的なこの世的なものを自慢してきた彼が、それよりもっとすばらしいものを見つけたと。それはこのイエス・キリストであると。この救いこそが私にとって最も自慢すべきことだと。これが私の誇りだと。この世の名利も成功も知恵も神の前に全く価値がないと。

パウロはⅠコリント3：19で「この世の知恵は、神の御前では愚かだからです。こう書いてあります。『神は、知者どもを彼らの悪賢さの中で捕える。』」と言います。神が喜ばれる知恵というのは神を知ることです。それこそ最も神の前に価値あるものだと。ですからこのパウロの証を聞く時に、私たちがしっかりと覚えるべきことは、パウロは救いに与ったことによって、本当に価値があるもの、神の前に価値あるもの、永遠に価値あるものは何かを確実に理解したのです。この世が約束するものは不完全です。この世が約束する満足というのは一時的なものです。一瞬は満足しているかもしれない。でもそれはすぐになくなってしまい、渴きを覚えます。この世があなたや私にもたらすものは何か——。この世に従って行けばそこにはすばらしい満足があり、喜びがあり、幸せがあると約束してくれます。でも本当のところ、この世があなたや私にもたらすものは死です。

パウロはローマ6：21で「その当時、今ではあなたがたが恥じているそのようなものから、何か良い実を得たでしょうか。」と言います。ここでパウロが言わんとしたことは20節に書いてあります。「罪の奴隷であった時は、あなたがたは義については、自由にふるまっていました。」、つまり救われる前は私たちは自分のやりたいことをして来たと。そして「あなたがたが恥じているそのようなものから、何か良い実を得たでしょうか。それらのものの行き着く所は死です。」と。この死というのは肉体的に死ぬ話なのかというと、22節でその説明をしてくれています。「しかし今は、罪から解放されて神の奴隷となり、聖潔に至る実を得たのです。その行き着く所は永遠のいのちです。」と。つまりこの世が私たちにもたらすものと神がもたらすものをパウロは対比してくれています。神がもたらすものは永遠のいのちであり、この世がもたらすものは永遠の死です。永遠のさばき、永遠の地獄です。この世がもたらすものはそれなのです。なぜなら今我々見て来たように、この世がすることはイエス様を信じていない人が救いに与らないように、また救いに与っている皆さんが神を第一に愛さないように、またみこころに忠実に従って行かないようにと邪魔することです。この世があなたや私に祝福をもたらすようなことはありません。でもこの世は巧妙にあなたのうちに働き、あなたを誘惑するのです。あなたを永遠の滅びに導くようなこの世に我々のいのちをかける価値はありません。罪からの救いや永遠のいのちをもたらすことができないこの世、またその中にあるものにもあなたがいのちをかけるそんな価値はありません。

では我々クリスチャンの誇りとするものは何か——。私たちの何よりも誇りとするものは主イエス・キリストのあの十字架であり、この救いこそが我々の誇りです。だから私たちは救いを下さった主の愛を覚え、その愛を奪われないようにしっかりと心と目を見張っていることが必要です。

2. 自分よりもキリストを愛する：我々は新しい人生を生きる者として生まれ変わった！

二つ目に神を愛するということに関して私たちが覚えるべきことは、自分よりもキリストを愛することです。実は我々はそういう人へと生まれ変わったということを思い出してください。クリスチャンというのは自分よりもキリストを愛する者へと生まれ変わった者たちです。Ⅱコリント5：15に「また、キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのです。」とあります。「キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々」、この救いに与った人々、信仰者、あなたの話です、生まれ変わったあなたは「もはや自分のために」生きるのではなくて、「自分のために死んでよみがえった方のために生きる」と。救いというのはそういうものなのです。かつては自分のために生きて来た私たちが、神の救いをいただくことによって神のために生きる者になるのです。そのような変化を神が私たちのうちにもたらしてくれるのです。そうすることによって救われるのではないのです。神が下さる救いというのは、神が望んでおられる生き方を行なって行きたいという願いを私たちに与えてくれるものなのです。パウロはⅡコリント5章の中で、救いというのは、救いに与った者たちが今までは自分のために生きて来たけれども、救われた後は、救ってくださった神のために生きる、それが救いだ、それがクリスチャンだと教えます。

パウロのメッセージを続けて見て行きましょう。ピリピ1：20に「それは、私がどういふばあいにも恥じることなく、いつものように今も大胆に語って、生きるにしても、死ぬにしても、私の身によって、キリストのすばらしさが現わされることを求める私の切なる願いと望みにかなっているのです。」とあります。パウロがこれを記した時、ローマで投獄されていました。皆さんに見ていただきたいのは、そのような状況にありながら、パウロは自分のことなど一切記していないということです。彼の関心は、そこから解放されることではなかったのです。彼の関心は別のところにありました。それはキリストの証がなされること、キリストが人々によって褒めたたえられることでした。もう一度20節を見ると、「私がどういふばあい

にも恥じることなく、いつものように今も大胆に語って」と、投獄されていようといまいと、彼が望んでいたことは「いつものように今も大胆に」このすばらしいキリストの救いを語ることです。そして「生きるにしても、死ぬにしても、私の身によって、キリストのすばらしさが現わされることを求める私の切なる願いと望みにかなっているのです。」、彼が望んでいたことはただ一つです。彼にとっては生きるとか死ぬとかはもうどうでもよかったのです。彼が望んでいたことは、「私の身によって、」、私の人生を通してキリストのすばらしさが証されることでした。それが彼の生きる目的だったのです。もし神が死を選ばれ、それが神の栄光を現わすためだったら私は喜んで死にます。神が私を生きながらえさせてくださるのだったら、喜んで生きます。なぜならそれによってキリストのすばらしさが証されるからです。ぜひ皆さん見てください。パウロが望んでいたことはただ一つです。生きるにしても死ぬにしてもキリストのすばらしさが証されたらそれでいいと。彼はそのことだけを望んで生きていたのです。

先ほど彼はこう言いました。「生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなの」だと。パウロはそれを実践していたということです。彼は自分のために生きる人生をもう捨てたのです。救われたゆえに、救ってくださった方のために生きて行くと。自分の栄光や自分のほまれのためではなく、この私を救ってくださった神の栄光のために、そのほまれのために生きて行くと。そのためだったら何でも構いません、神様、どうぞあなたの栄光を現わす器として私を使ってくださいと。これがパウロだったのです。ですからこのピリピ2:21で「私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。」と告白したのは、パウロの人生の目的はキリストの栄光を現わすことであった。ですからその目的のために主がよしとされることを彼は喜んで受け入れたいと願っていました。このように生きた信仰者、神様がもう少し地上にいなさいと言われたら喜んで。また主が終焉の時が来たと言われたら、それもすばらしいと。なぜならば主のもとに行くことができる。

ピリピ1:23を見てください。地上に生きることと召されること、「二つのものの間に板ばさみとなってい」と。彼自身の願いを言うならば、「世を去ってキリストとともにいることです。実はそのほうが、はるかにまさっています。:24 しかし、この肉体にとどまることが、あなたがたのためには、もっと必要」だと。だからパウロはこう言うのです。自分の願いだけを言えるのだったら、私の願いはもうイエス様のところに行くことです。罪のからだから解放されて、神を悲しませることのない、そんな日々を過ごせる、だから早く神のもとに行きたい。なぜなら私たちはその時に罪のからだから解放されて完璧に神の栄光を現わすわけです。だから神のもとに早く行きたいとパウロは望んでいた。でももし神が私を地上に置いてくださるのなら、間違いなくそれは他のクリスチャンたちにとってプラスになると。なぜならパウロは彼らを教え導き、彼らが信仰者として成長するように働こうとしていたし、そのために生きて来たからです。ですから自分の願いだけ言うならば、どちらもすばらしいと。パウロが教えたいことは、自分がどちらを選ぶかではないのです。神様がどちらを選ばれたとしても、私は喜んでそれに従って行くと。つまり彼の人生に自分はなかったのです。彼の信仰者としての人生にあったのはただ神だけだったのです。この神のためにどのように生きて行くかです。パウロは神に喜ばれることかどうか、神の栄光を現わすことかどうか、それをいつも考えて選択をした人です。自分が今やろうとしていること、考えていること、これが神の前に正しいのかどうか、神を喜ばせるのかどうか、神の栄光を現わすのかどうか、それを考えて彼は選択したのです。自分にとって何がいいかではなかったのです。どちらが神の栄光を現わすのか、どちらが神に喜ばれるのか、それをもって彼は選択をしたのです。道理で神様は彼をお喜びになったかお分かりになると思います。彼には自分がなかったのです。何とか神を喜ばせたい、何とか神の栄光を現わして行きたい、そのことしか彼は考えていない。まさにそれが「心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、」神を愛することの実践なのです。

ある人にとってはそれは非常に難しいと言われるかもしれない。恐らくパウロにとっても簡単なことではなかったでしょう。ですからパウロが教えてくれるのは、いつも彼は神がこんな罪深い私のために何をしてくださったのか、いつも救いを覚え続けていたのです。

先ほどのⅡコリント5章に戻って、15節でパウロは救われた私たちはもう自分のために生きるのではなくて、自分のために死んでよみがえった方、この神のために生きるのだということを教えました。そのような生き方を彼が実践できたのは、14節「というのは、キリストの愛が私たちを取り囲んでいるからです。」とあります。つまりこういった歩みを彼自身が実践できたのは、キリストの愛がその原因だと。キリストの愛が私をそのように生きて行くように推し進めて行くという話です。なぜなら我々がイエス様があの十字架の上でいのちを捨てて救いを備えてくださった、その尊い犠牲を覚える時に、「神様、ありがとう」、「イエス様、ありがとう」と感謝の心がわき上がって来ます。神様に感謝している人たちというのは、どのようにこの感謝を表していこうかと考えます。パウロが教えているのはそのことなのです。キリストの愛が彼を推し出して行ったのです。どうやってこの感謝を表そうかと。何のために生きているのか、だれのために生きているのか、この神が与えてくださった人生はだれのために生きる

べきなのか、そのことを正しく理解してそのように実践したのです。彼は自分自身よりもキリストを愛したのです。自分のことはどうでもよかったのです。キリストさえ喜んでくださったなら、キリストの栄光さえ現わせたならそれでいいと。主を優先して、主を第一として生きていたパウロ、神様は我々も同じように生きることを望んでおられます。

☆ 主を喜ばせることを願って生きること。そのためには……

あなたがこのパウロが歩んだように生きることを神は望んでおられるのです。そのために主イエス・キリストはいのちを捨ててあなたを救いへと招いてくださったのです。我々信仰者は目を覚まさなければいけません。皆さん、いつまでも世を見ているのではないのです。世はあなたに何の祝福ももたらさない。世を愛することは神に敵対することです。我々が見るべきものは主イエス・キリストの十字架であり、神がなしてくださったみわざです。

① みことばに従うこと

あなたがパウロが生きたように生きて行くため、もちろんパウロだけではなく、かつての信仰者が生きたように生きて行くために必要なことは、まず一つ目はみことばに従うことです。どんな時でもあなたがみことばに従い続けて行くならば、パウロが歩んだようにあなたも生きて行くことができます。心から神を愛してあなたも神に従って行くことができる。

② 悪を憎むこと

二つ目に悪を憎むことです。これはパウロだけではない。かつての信仰者も同じように生きて来たのです。神が喜ばれた信仰者に共通していること、彼らはみことばを愛し、神の命令を愛し、それに従い、彼らは悪を憎んで悪から離れたのです。

③ 熱心に仕えること

そして三つ目、彼らは熱心に主に仕え続けて来ました。まさにこれこそが「心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして」神を愛する生き方です。

◎ そのように生きた聖徒たち

その例を挙げます。

① ヨシュア：ヨシュア 24：14－15（16－29）

ヨシュアというひとりの人物を覚えておられると思います。ヨシュアがヨシュア 24：14 でこんなことを言っています。「今、あなたがたは主を恐れ、誠実と真実をもって主に仕えなさい。」、心から神様に従って行きなさいと。「あなたがたの先祖たちが川の向こう、およびエジプトで仕えた神々を除き去り、主に仕えなさい。」と。神様に対して忠実に歩んで行くように、神に対して熱心に歩んで行くように、そして罪から離れるようにというメッセージを与えています。同時に「エジプトで仕えた神々を除き去り」なさい、あなたたちのうちから罪を除けと言っているのです。パウロだけがそんなふうにしたのではないのです。ヨシュアもそんなふうにし、イスラエルの民にそのことを命じたのです。もしあなたが主に喜ばれたいと望むのなら、主が命じることを忠実に行なって行きなさい、熱心に主に仕えて行きなさい、罪から離れなさいと。

② ダニエルと友人たち：ダニエル 1：1－8

ダニエル書 1 章、ダニエルと 3 人の友人たち、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴを思い出してください。バビロンの王様ネブカデネザルはユダを包囲して、神殿のさまざまな器具をバビロンに持ち帰りました。同時にイスラエル人の中から王族か貴族を数人選んでバビロンへ引いて行きます。（ダニエル 1：3）すばらしい少年たちであったということが 4 節にも出て来ます。8 節を見ると「ダニエルは、王の食べるごちそうや王の飲むぶどう酒で身を汚すまいと心に定め、身を汚さないようにさせてくれ、と宦官の長に願った。」と記されています。なぜダニエルはそんなことを望んだのかです。ネブカデネザル王様はこの捕虜のために十分な食料を提供しました。この捕虜たちは、何においても欠乏していなかったのです。ぜいたくな生活が約束されていたのです。彼らは王の食卓から日々食べ物やワインの一部が当てがわれていました。ではなぜ食べる物にも困っていない中で、ダニエルがこんなことを言ったのか。それは、彼らは異邦人です。彼らの食べ物の中にはユダヤ人たちの律法に反するものがあつたのです。またこの王たちが食事をする前には、彼らの偶像にそれらのものが捧げられていたのです。それも実は律法が禁じていたのです。ですからダニエルがその王の食事を摂りたくないと言ったのは、彼は神に従いたかったからです。律法に反することを行ないたくなかったのです。ではワインはどうだったかというと、確かに聖書の中には強い酒の禁止が記されています。ユダヤ人たちはワインを飲む時に水で割ったのです。10分の3ぐらい、また10分の6が水であつたとか、10分の9が水であつたという記録もあります。ユダヤ人はそうして酔うことなく、神の律法に反しないようにしたのです。しかし、バビロン人は水で割ることはありませんでした。「身を汚すまい」と書いてありました。ダニエルがこんな要求をしたのは、このようなことを行なうことによって神の律法に反することを彼は恐れたのです。ダニエルは主のみこ

ころに従順でありたいと願っていました。神を喜ばせたいと望んでいたのです。彼と3人の友人たちもきよくありたいと望んで生きたのです。

信仰の勇者たちというのはどの時代であっても、どの場所であっても変わらないということです。彼らに共通していたことは、常に主のみこころに従って行きたいと願っていました。今私たち、神の完全な啓示をいただいている者は同じことが言えます。神のみことばに従う以外に神様の祝福をいただく方法はありません。主のみことばをしっかり学び、それに従うことです。罪から離れることです。そして主に熱心に従って行くことです。ヨシュアもダニエルもその友人たちも、そしてパウロもみんなそのように生きたのです。今私たちに必要なのはそのような信仰者なのです。主のみことばに従って行く、どんな時でも主に熱心に従って行く、罪から離れて、主に喜ばれることをいつも願い、そのような選択をして生きて行く。そういう信仰者です。そういう信仰者が今こそ立ち上がらなければいけない。今この世界にあって、この日本にあって、私たちの町にあってそういう信仰者が必要です。そういう信仰者が家庭に必要なのです。

讃美歌235番、聖歌216番、ウィリアム・メリルという人が書いた曲です。

讃美歌はこうあります。

主の御民よ、奮い立ちて、
力の限りに 主に仕えよ。

訳すのは大変難しかったと思います。もともとの意味を見てみると、1番「神の人々よ、立ち上がれ。価値のない物事との関係を断ち切り、王の王に仕えるためにあなたの心を、知性を、思いを、そして力を主に捧げよ。」とあります。3番には「神の人々よ、立ち上がれ。あなたの教会は待っている。教会の力はその任務に十分ではないから、立ち上がれ、そして教会を最高のものにしなさい。」と。1番では主に仕えることを人々に勧め、3番では教会にあって主のために奉仕しなさいと勧め、そして4番では「キリストの十字架を高く掲げよ。主の御足が歩まれたところを歩め。人の子の兄弟として立ち上がれ、神の人々よ。」と、主に従いなさいと勧めるわけです。

信仰者の皆さん、そのように生きることを神は望んでおられます。問題はいつそのような歩みを始めるのかです。もしそのような歩みを既に始めておられるのなら、どうぞそのように歩み続けてください。もしそうでなかったら、これまでの信仰が非常にあいまいなものであり、ルーズなものであり、不信仰なものであったら、今罪を悔い改めて、「主よ、きょうから私はあなたが喜ばれる信仰者としてあなたに従って行きます。熱心に仕えて行きます。罪から離れてあなたに従います。私を祝して用いてください」と、その決心をしてそのように生き始めることです。“神の人々よ、立ち上がれ”、今こそこのメッセージをあなた自身に語らなければいけない。

ちょうど60年前の1月8日、ジム・エリオット、ネート・セインツ、エド・マッカーリー、ピーター・フレミング、ロジャー・ヨードリアン、この5名の宣教師がエクアドルのクラレー川にあるパームビーチで殉教しました。この5人の若い宣教師たちはそこでいのちを落としました。彼らがそこに宣教師として出て行ったのは主が導いてくださった。彼らはそこにいた福音を聞いていないワオラニ族という部族にキリストの救いを何とか伝えたい、このすばらしい救いを知ってもらいたいと思って出て行きました。やっとコンタクトを取って、彼らと顔と顔を合わせてキリストの福音を語ると意気揚々と出て行ったこの5人。そこで5人は彼らによって殺され、殉教の死を遂げました。その中のひとりのネート・セインツがこんなことを言っています。「主を信じていない人々はなぜ我々が宣教師として人生をむだにするのかと尋ねる。彼らは自分たちも人生を過ごしていることを忘れている。そして泡がはじけた時、つまり死を迎えた時、彼らには永遠に意義のあるものが何一つない。そのことが長い人生をむだにしたことを明らかにする」と。

皆さんは自分の人生をむだにしていますか？特に救われている皆さん、救いに与ったあなたは救われた者としてむだな人生を過ごしていませんか？この世を愛して、この世にどっぷり浸かって生きていませんか？主はそんなためにいのちを捨てられたのではない。あなたや私がこの主のために生きる者として新しい歩みをするために主はいのちを捨て、あなたを救ってくださった。我々信仰者が覚えなければいけないのは、私の人生が主の前に価値あるものかどうか、私は本当に主を喜ばせるように生きているのかどうか、神の栄光のために生きているのかどうかです。そのことを考えてあなたは自分の人生をしっかり吟味しなければいけない。むだな人生を過ごして来ていませんか？主にお会いする備えはできていますか？感謝なことに主の前には何度でもやり直すことができるのです。主が私たちに望んでおられること、「心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛」しなさいと。それを実践することです。この世よりも私たちの主を愛することです。自分よりもこの主を愛してこの方の栄光のために、この方のすばらしさが証されるために生きることです。そうやって信仰の勇者は生きました。あなたはどんなふういきょうから生きて行きますか？この決心だけはあなたがしなければい

けない。主よ、どうぞ私を使ってくださいと。神の人よ、今こそ我々は立ち上がらなければいけない。あなたはどうかしますか？立ち上がることです。そして主のために生きることです。その人生こそ、主の前に価値あるものです。

《考えましょう》

1. 「心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くしてあなたの神である主を愛せよ。」とは、どのように生きること教えているのでしょうか。あなたのことばで記してください。
2. 「世を愛する生き方」をあなたのことばで説明してください。どうしてこの生き方が間違っているのでしょうか。
3. 「自分自身よりも神を愛する」こととはどのように生きることかをあなたのことばで説明してください。
4. あなたはきょう主から何を教えられましたか？あなたがきょうから実践しようと決心したことを信仰の友と分かち合い、祈り合ってください。